

第2回 丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略推進委員会

日時 平成30年2月23日（金）

19時00分～21時00分

場所 氷上住民センター実習室

出席者（敬称略・順不同）

○委員 大野亮祐委員、谷水ゆかり委員、山本寿朗委員、畑道雄委員、高見謙二委員、八尾由江委員、足立宣孝委員、大木玲子委員、足立浩委員、三井優生委員、山下淳委員、足立昌彦委員、荻野祐一委員

※欠席：北村久美子委員、丹生裕子委員、前田文雄委員、酒井芳朗委員、岡絵理子委員、北山芳明委員、大久保徹委員

○丹波市 鬼頭哲也副市長

（事務局）西山政策担当部長、近藤総合政策課長、荻野総合政策課政策係長、船越総合政策課政策係主査

1 開会

2 副市長あいさつ

3 会長あいさつ

4 協議事項

（1）丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略の改訂について

※事務局より説明

（2）質疑・意見

委員：様々な分野・業種の方がおられるので、この事業について意見がほしいといったようなものはあるのか。

事務局：今回の推進委員会は、改訂にあたっての意見を伺いたいと思っている。新規・拡充が17事業、廃止が1事業、KPIの見直しが13事業となっており、これらが改訂する内容となっている。このことについてご意見をいただきたいが、たくさんの事業数となることか

ら、新規・拡充事業を進めていくにあたって、人口減少を食い止めるための効果を生むためにどうしていくか、どういう工夫があるか、どのようなやり方でやっていくべきかというあたりをそれぞれの分野の皆さまからご意見をいただければと思います。

三井：ローリスク・ローリターン、ハイリスク・ハイリターンといったように予算を組まれていると思うが、チャレンジとして取り組まれる事業は何なのか教えていただきたい。

副市長：行政が税金を使って取り組む場合、リスクはできるだけ避けるように基本的にはしている。ただ、それだけでは効果が得られないこともあり、冒険が必要な時もある。その中で、平成 30 年度はハイリスクというよりも重点的に進めていく事業として、20 年 30 年後を見据えた都市構造のあり方を検討していく。病院ができるとその周辺に商業施設などの一定の機能が集積され、道路の拡幅等の整備がされることにより、開発意欲が高まってくる。そういった場合に無秩序な開発も規制しなければならない。多機能自治や公共交通網等の様々なことをどうしていくのかといったことを検討していくのが 1 番力を入れている事業になる。

委員：高校生提案事業について、やり方として良いコーディネーターを付け、高校生に好きにやらせてみると面白いし、それをサポートし実現させてやると盛り上がると思う。大人でサポートをすると大人の考える事業になってしまうので、やり方に工夫を入れて面白い事業にしてもらえたらと思う。

事務局：平成 29 年度に分野別のタウンミーティングを行いその中で出た高校生の意見の中で自分たちの使う駅がもっと魅力化できないかというような意見からヒントを得て事業化したものである。これは、大学生や地域の方々と協働しながら、自分たちで駅をイルミネーション化するという取り組みであり、高校生がまちづくりに参画するきっかけづくりになればと考えている。

委員：予算 388 億円の中身の検証がどうやって行なわれるのか。マネジメントを抜きにして、目標値がこうであるという説明をされるが、予算と事業がマッチした形で 5 年後、10 年後の目標に向かって、職員が自覚を持って事業に邁進するというような目標値になっているのか疑問である。

事務局：人口減少を食い止めるために作成されたものが、総合戦略であり、その施策について集約をしております。第 2 次総合計画では、全ての施策を目標値を持って反映したものであり、施策評価や事務事業評価等により PDCA を行い進めさせていただいております。職員においては、全ての部長で構成する推進本部会議で目標値等を確認したうえで、この推進委員会にお示ししているところです。

委員：新規・拡充事業 17 事業、廃止が 1 事業であり、職員数が減る中、大変だなと思って

います。その中で、地域資源活動の促進事業の委員をしているが、新産業創造課の地域資源活用の事業と今回新たに作られているシティプロモーションの事業が同じようなものとなっている。内部で確認されて事業を作られているとは思いますが、似たりよったりの事業が次々と出てくると全て中途半端に終わってしまう。同じようなことをそれぞれの課で行い、それが市民からみてもわかりにくくなっている部分もある。各課で連携をとっていただき進めていただきたい。

事務局：それぞれの事業について、ターゲットや目的を明確にしながらか支援していくべきであり、ご指摘の点については留意しながら進めていきます。

委員：福知山市の出生率が1.96と非常に高く取材を行いました。全国で福知山は34位、人口は約8万人であり、人口は減少しているものの年間約300人の減少に留まっている。なぜ、高い出生率が維持できているのかということ、働く場所があるというのが1番大きな要因である。長田野工業団地で6千人程度働く場が確保されている。今回の新規・拡充事業を見ても働く場の確保に繋がる施策があるのか、はたして人口減を食い止める事業になるのか疑問である。現実的な話をすると隣の町に働く場があるのだから、そこをもっと活かせるようにすればよい。合同就職セミナーには福知山市も入ってもらい、就職を控えた大卒者は初めて働ける場所を探すので、近くにこれだけの企業があるというPRをしてもよいのではないか。30分程で通勤できるのだから、隣接の町を巻き込んだ働く場のPRをされてはいいかと思う。

山下会長：丹波市、朝来市、福知山市がそれぞれ連携した取り組みや役割分担した取り組みが必要であると以前にもご意見をいただいている。

事務局：3市連携の中で、事業に取り組んでいるが、今はまだ効果的に取り組んでいるわけではない。北近畿から阪神間に流出している人口を3市で食い止め、産業育成や観光振興等を福知山公立大学を核にして人材育成を図りながら進めていくことをコンセプトにしている。丹波市に住んで3市の取り組みの中でやっていけるところはあるが、今の段階では効果のあるものは始まっていない。

副市長：福知山市の出生率が1.96に対し、丹波市は2010年1.66だったものが2015年1.61に下がっている。人口規模や歴史も似通っているにもかかわらず何故これだけひらきがあるのかを調べてはいるが、よく分からないのが正直なところです。確かに工業団地があり、働き口があって、若い人が市外に出ずにそこに住んで働けるので、子どもを産んで育てられる環境がある。では、丹波市は働く場がないのかということと有効求人倍率もよく、むしろ人手不足となっている。ただ、若い人が望むような職業がきっちりと確保できているかということももしかするとあるのかもしれない。大きな工場を誘致して、どんどん働き口を増やす

というよりも、もう少しスモールビジネスのように若い人がやりたいことをやれる、チャレンジして成功できるような支援をしていくというのが丹波市の方向性ではないかと考えている。方向性が違うということであれば、ここでご意見をいただき方向性を修正していく必要があると思っています。

委員：やりたいことがやれる町になっているのかということを感じる。やろうとした時に潰してしまう風潮が丹波市にはあるように感じる。仕事があり他と条件は変わらないのに丹波市だけ駄目なのだから、人を育てる方法を色々な所で議論をしておしていく必要がある。

山下会長：有効求人倍率はよい数値になっているが、やりたい仕事があるのか、やりたい仕事をやっていけるように支えていける仕組みになってうまく機能しているのかを考えてみる必要がある。

委員：子育ての現場でお母さんたちの生の声を聞くと夫の収入が低く、2人目3人目が産めないという人が多い。工業団地の話を聞いて、本当にその通りだと思っている。将来、子どもを大学に行かせられるかといったビジョンを描けるかどうかが大切だと思う。働くところがあるという安心感は一方で必要な視点ではないかと思っている。中小企業支援のようにチャレンジと平行して普通に働いて安定した収入が得られるような取り組みも作っておかないといけない。また、地域資源という言葉が出るが何を地域資源と考えていいかわからない。地域資源の捉え方や枠を広げ事業展開をしてもらいたい。農産物の他に勤勉で真面目に働く人が多いことも地域資源ではないかと思っている。

委員：県・市・JA とで定期的に農業の振興について話し合っているが、その内容が事業として組み込まれており、評価したいと思っている。特に鳥獣害が生産拡大の1つの阻害要因であり、そこに手厚く予算措置がされている。海外輸出支援事業については、市・JA と海外視察に行ったがすぐには無理であり、様々な工夫がいて感じている。

委員：丹波市には子どもを連れて行くところがない。丹波竜というすばらしいものがあるのにどれもインパクトに欠ける。化石工房にしても2回行こうとは思わない。子どもにとって恐竜は魅力のあるもので、子ども園でも1番よく借りられるのは恐竜の本である。それくらい子どもにとって恐竜はすばらしいものであり、恐竜の公園があればいいのになと感じている。たくさんの事業をされているが、もう少しメリハリのある予算にするべきだと感じている。行きたいと思う魅力のある恐竜公園を整備すれば外から人が集まってくると思うし、小さい事業ばかりしていてもあまり効果は得れない。せっかく丹波竜というすばらしいものがあるのだから投資が必要だと思う。

委員：新規・拡充事業については、市民への機会・チャンスを与える事業が多い印象を受け

た。ただ、市民がこういった事業に乗ってこないと成立しない事業であり、商工会が受けられているチャレンジカフェなどのようなプロセスが大切で、そのプロセスを経て市民がチャレンジできている。事業に参加していけるようなコーディネーター役などのシステムが必要である。

委員：自治会長会の立場として、こういったたくさんの資料が行政側から示されるが、市民がどれだけ理解されているのか、周知されているのかと思う。自治会長会で話をされたこともないし、当然自治会長も知らない。市民の意識をどうやってあげていくかやり方を考えていく必要がある。自治会長会で説明をいただければと思う。

委員：商工会も職員が少なく大変ではあるが、どうにかしなければという視点に立って、今何が求められているのか考えている。あれもこれもとなると行政も大変で、ある程度絞り込んでいかないと市民からも行政が何をやっているのかわからないという声も聞く。多くの事業をやられるのはいいことではあるが、もう少し絞り込んで1つ2つを確実に実現するほうが市民にとってもよくわかり効果があるのではないかと思います。

山下会長：広く市民に知らせるというよりは、ターゲットを絞り必要としている市民に対して情報提供が必要である。

委員：すでに事業をされている事業者が後継者不足や高齢化により廃業に追い込まれている。そういった事業者に対しての施策があってもよいのではないかと思います。信用力もある事業者がなくなっていくのはいかなものなのかと感じている。市民としての立場では、先日、厄神大祭がありましたが、昔はずっと渋滞が続いていたが、今年は土日であったにも関わらず、ほとんど渋滞もなかった。こういった祭も地域資源として大切なものではないかと思えますし、市民として大切にしていかなければならない伝統の1つではないかと感じる。

委員：丹波市の地域資源は人である。子どもたちを連れて行く場所はないかもしれないが、会わせたい人はたくさんいる。その人たちに教えてもらいたいこともたくさんある。子どもたちが興味を持てる話ができる人もたくさんいて、本物の町であると感じている。勤勉な人が多いことも感じてきましたし、子どもたちもそういった中で関わっていくことで、みんなが大切にしているものを知っていくことになり、共感していく中で育ってこそ、やりたいことをやれる町になっていくと思う。やりたいことがある子どもたちが育っているのか、この町をどうしたいと思う子が育っているかということが大切である。そうでなければ、高校を卒業する時に、地元で就職・地元が大切と言ってみても何も感じないのではないかと思います。都会に1度は出て様々な経験を積んで、また丹波市に帰ってきてほしいとは思いますが、都会に出てもある時期になると丹波市のことが気になるような子育てが町全体で本当にできているのかと思う。また、発達障害のある子どもたちの就職支援の際に、京都に引越しを

しないといけない家族があった。発達児童支援の施設が都会では多くあるが、丹波市は3つだけです。発達障害のある子どもたちが社会の入り口に立ったとき、8時間労働ではなく6時間でもよいというような調整や支援をするジョブコーチが丹波市・篠山市合わせて2人であり全然追いついていない状況である。丹波市にいたいのに出て行かなくてはならない状況がある。

委員：福知山から丹波市に仕事に通う人になぜ丹波市に住まないのかを聞いたことがある。福祉が整っていると言っていたが、予算もそんなに変わらないのにどういうことかと思っていると、相談体制が整っていると言われていました。福祉人材確保事業についても工夫が足りない。社会福祉法人に聞き取りしただけで考えたのではないかと思う。市民がやりたいこと、市民がやりたい事業を市が提案できているのだろうか疑問に思う。考え直さないといけなくて、もっとリサーチして、市民がやりたいこと、やりたい事業をサポートできるようにしていくことが大切である。

5 その他

丹波市の歌（仮）公募についてPR

6 閉会